OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヨーロッパの民族服にみられるデザイン
Author(s)	中嶋, 朝子
Citation	デザイン理論. 1969, 8, p. 76-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52515
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヨーロッパの民俗服にみられるデザイン

中　嶋　朝　子

緒言

民俗服の研究は被服文化史に取扱われている服飾の研究に比較して，時代的変化も少なく，一見単純なようであるが，各民族・国家・地方の住民達の生活基盤との関連において促えようとする場合，その資料の不足から実に困難な点が多い。しかし民俗服の研究には住民の生活基盤との関連について考察することは不可欠な問題である。かゝる立場からみた場合，我が国の場合は兎も角，ヨーロッパの場合は私にとって極めて困難なことである。それを敢えて試みようとしたことに無謀さを感じるのであるが，それについては今後の研究に委ねて，ここでは私が 100日間に歩いて得た資料に基づいて，ヨーロッパの民俗服に現われた特色などについて書いてみようと思う。

民俗服の概念

服装大百科事典[①]の「民族服と民俗服」のところで次の如く述べてある。「一般に民族の概念が人種・言語・宗教を中心とした文化特性を共有する社会協同体をさすのに対し，民俗の概念は単に民間の習俗をさす。したがって文化という基底の認識は共通していても，前者は自然的・地域的・歴史的側面に立つのに対し後者はより社会階級的認識を前提とするところに相違がみられる。……

……民族服とは日本での小袖形式の和服（きもの）であるのに対し，民俗服とは農・山村での農民服や漁村での漁民服であるが，これら民俗服もまた広義の民族服に包含される性質のものである。元来，西洋での民族服は主としてルネサンス以降に発する都市貴族的流行服に対置する一般の民間服であるが，近代社会になると，これが都市と農・山・漁村という対置概念に置かわってくる。したがって，A·M·Nylen のいう都市的流行服に対する農民服という関係が生れてきた。ところがこれと並行する国家的国民としての民族概念は，国際的見地から民族的特色をうたうことになり，都市的流行服の国際性に対する対語として，国民的民族服の特色を認識するようになる。この種の民族服の構成因子には当然民俗服や農民服も含まれ，特に国際服そのものが元来自らの都市流行服たらざるを得なかったヨーロッパ社会では，民族服 ＝ 民俗服であったわけであるし，一方において民俗服の中に都市的流行服の要素が受容され，次第に沈澱していく過程をとるのであるから，一層区別がむずかしいことになってくる。」と。

実際上，民族服と民俗服との使い分けに当って具体的にどの範囲までが民族服であり，この範囲が民俗服であるという，両者の間に一線を引くことは困難なようである。特にヨーロッパのそれにおいて。

他方，民俗学という言葉が使われているが，民俗学辞典[2]によれば，「民間伝承を通して生活変遷の跡をたずね，民族文化を明かにせんとする学問である。最初英国において Folk-lore の名前でこの研究が始まり，1878年民俗学協会が成立した。つづいてフランス・ドイツ・スペイン・イタリーをはじめ北欧諸国，さらに米国にも学会の誕生をみた。Folk-lore という言葉は本来民間の知識という意味で使い初めたのであるが，これを研究する学問の名称にも同時に用いられている。したがって両者をはっきり区別する必要のあるときは，学問の方を Science of Folk-lore と呼んでいる。ドイツでは民俗学を Volkskunde と称しているので，かかる問題は最初から生じなかった。その代り Volk を国民全

体と見るか，あるいは下層民と見るかについてやかましい議論が行なわれてきた。わが国では Folk-lore に対して，俚俗学・俗説学あるいは土俗学などとも呼び訳語が一定しなかったが，大正末年から昭和へかけて民俗学という名称に統一せられることとなった。民俗学の課題と研究内容は国によって必ずしも同一ではない。……」と。

ところでこの説明のはじめに民間伝承という言葉があるが，何を意味しているのであろうか。同辞典によれば，「常民の間にみられる知識および技術の伝承を意味する」とある。ここで常民という言葉が使われているが，これは柳田国男氏や渋沢敬三氏が使いはじめられた言葉で，民間ということを意味し，それは官界や階級に促われない呼び名で，庶民と同じような意味を持っているが武士階級をも含めたものゝようである。言葉の意味は兎も角として，私は民俗の意味を各地方の住民が自らの生業に基づいて生活している人々を考えたい。

次に民間伝承は如何にして成立するかについてみる。未開民族は自己の過去の文化に対する反省が少ないから，当然そこに自己の民俗学は成立しない。それに対し，文化民族においてはじめて自己を意識し自己の過去を振り返えることをする。そこに民俗学が成立するわけで，つまり自分達の生活の手段・状況・出来事などを把捉し・反省し・伝達し，あるいは記録してゆくところに民間伝承が成立するのである。その成立過程において，人間は価値を意識したり，歴史意識を持ったりするが，そのことを通して伝統という精神的な社会的遺産が形成されてゆく，と考えるのである。

次に民間伝承の手段についてみるに，民俗学辞典には「民間伝承は日常生活における慣習を対象としていて，それは何回となく繰返される類型的な生活事実である。日常生活の中で実践され，意識的また無意識に口承あるいは以心伝心によって世代伝承される生活体験の蓄積である。」と。ところで歴史学においては，その使用する史料は概ね文書記録として出されており，大体において事件を中心とした個別的な事象であり，時日を明確にすることのできる資料が重

んぜられる。それに対し民俗学の問題とするところは卑近なものが多い。民俗資料について日本の民俗学では三部に分類し，第１部…有形文化（この中に衣服が含まれている），第２部…言語芸術，第３部…心意現象，としている。

そこで民俗学における衣服の占める加重を考えてみるに，概して軽視されていた観がある。柳田国男全集35巻中衣服を題材としているものは第14巻の46頁に過ぎない。しかし単行本として瀬川清子著「きもの」[3]には日本の農漁村の衣服および衣生活に関してかなり詳細に記録されている。世界的にみた民俗服については「世界のきもの」[4]と題して，田中薫・田中千代共著のカラーブックスがある。その他民俗服の資料となるものは郷土研究家の著書の中に断片的にみることができる。

以上の如く民俗服は，民俗学の立場からみれば民俗資料の一つであり，衣服の観点からみれば国家・地方または民族に固有の衣服で地方的特色を備えている，と理解できる。したがってそれは国際的な流行服とは区別して考えたい存在である。しかし民俗服は社会情勢の変化に伴って消えてゆく運命のものもあるが，伝統を誇る衣服として残存しているものもある。民俗服は確かに各々の民族・国家・地方の生活文化の遺産の一つである。そこに住む人々の日常生活を基盤として作られたもので，他との交通の不便であった時代には，その土地の気候・風土や自然の産物・生計の種類（農業・漁業・遊牧など）・社会事情（特に宗教）などが彼等の衣服を大きく規定していたと考えられ，他方他との文化交流をもったところでは様々な文化の混合によって作りあげられたと見做される民俗服がみられる。前者の例はノルウェーにおいてみられ，後者の例はスイス・チェッコなどにみられる。以下ヨーロッパ数ケ国の民俗服に関する資料に基づいて，それら民俗服に現われたデザインの特色などについて考察する。

ヨーロッパの民俗服の概要

ノルウェー……現代では，男性は民俗服を殆んど着ないが，女性の場合は今

日でも 150種の異なるタイプの民俗服がお祭りの時に着用される。西部ではBergen の町に近いところでも Local Costumes が残っていて，それは農家の先祖伝来の家の財産であるばかりでなく，社会的地位の印にもなっている。農民服には紀元前にさかのぼる起源をもっているものもある。あるいは南部Setesdal のものはバイキング時代の面影をとどめている。しかし殆んどは中世末期の流行が基調となっていて，その後各時代の流行の影響を受けて多少変化している。ノルウェーでは原則として同じ教会に属する住民は同じタイプのコスチュームを着ている。今日の女性のものは，写真１・２・３に示すように，胸衣とスカートと前掛で，胸衣の下に白いブラウスまたは革のチョッキを着る，寒い時は上からジャケットを着る（写真３参照)。胸衣は鮮やかな色（主として赤）で，ホーダーで縁どりしたり，豪華な金具で装飾され（写真２参照)，コスチューム全体の色彩効果を高める効果をもっている。ブラウスの衿は立襟が普通で，その喉のところに銀のビローチを飾っている。

写 真　1

写 真　2

写真　3

写真　4

Head-dress は多種多様で，これは地方色を示し，また既婚か未婚・寡婦の区別を示している。色彩は，一見中世的で黒・白・赤が主色で金・青が対照的な色として少し使われている。しかし西部と東部では多少異なっていて，東部の方がスェーデンの影響もあり，花模様のスカートや胸衣がみられる。

オランダ……オランダでは現在でも伝統的なコスチュームが着用されていて，Marken・Volendam・Zeeland では，それは観光の対象となっている。これらのうち Marken のコスチュームは凝ったもので，写真4のようにブラウスは縞で，胸衣はカラーフルな（赤・青・緑・ローズ・黄など）装飾がほどこされている。木靴も装飾的なものである。Volendam のものは写真5のように花模様のヴェストの上に黒い上衣を着てスカート（襞の多い鮮やかな縦縞のもの）をはき前掛をはめる。前掛の上部はヴェストと同じ生地で仕立て，他の部分は上衣と同じ黒である。上衣の襟周と前掛の紐の部分はボーダーで飾られている。帽子は木綿のレースである。Zeeland では地域的に多少

異なっていて，またプロテスタントかカソリックかによっても僅かに異なっている。

男性のコスチュームは装飾された銀のベルトボタンが特徴である（写真５参照)。

オランダ独特の木靴は低い湿地では必要品であり，厚い木靴は水が滲みこまないし，冬は暖かく夏は涼しく価はやすい。室内に入る時は戸口に木靴を脱ぎ，室内では男性と子供はストッキング，婦人はスリッパをはく。

ドイツ・オーストリ……つまりドイツ語圏の地方では，女性の民俗服であるディルンドゥル（ Dirndle ）をよくみかけたし，デパートでも販売されていて，近頃流行していると聞いた。

ボンの Schutzenfest（年1回8月の第１日曜日に行われる行事）の行列にはバイエルンの色として尊とばれている挽茶色の服を着て勲章をいくつも胸につけた人々を見る機会を得た。バイエルン州はミュンヘンを中心とする，結束強く誇り高いバヴァリア人の土地である。

写真６はザルツブルグで出会った若

写真　5

写真　6

写真　7

いカップルで，男性はバイエルンの色の背広服，女性はディルンドゥルを着てカーディガンを羽織っている。ディルンドゥルの民俗服を購入した時，店員の女性にその名を Dirudelkleit（スカート)・Bluse(ブラウス)・Schürze(前掛)と書いてもらった。スカートは胸衣と続きになったもの，ブラウスは乳の下までの短かいもので，前掛をすることによって服装全体がひき立ってくる。

チェッコ・スロバキヤ……チェッコの民族はスラブ系で，スラブの民俗服は世界的にも愛らしいものである。チェッコは文化的に西部のボヘミヤ・中央部のモラビヤ・東部のスロバキヤの三つの地域に大別して論じられているが，そのうちボヘミヤは有史以来，東西南北の交通の十字路にあたっていたところで，様々の文化の影響を受けてきた。スロバキヤには古い時代の民俗服が残存

写真　8

しているとのこと。

プラハのドレスメーカーの店では民俗服を取扱っていて，その花嫁衣裳・外出着・子供服など陳列されていたが，その材料の取扱い方・配色・刺繍・レース・縁飾り・アクセサリーなど素晴らしいものであった。その店で貰った民俗服の写真を７・８に示す。また偶然その店で出合ったパレチュコバ夫人の家で，彼女の花嫁衣裳を着せてもらったが，ブラウスはパフスリーブ（写真７のような）の白の木綿であったが，他は絹で，クリノリン風のスカート(膝頭の長さ)に胸衣を着て前掛をはめ巾 10 cm 余の帯を結んで後に垂らし，装飾的な衿巻で飾り，輪状の髪飾りをのせる。

スイス……写真９はスイスの地域的区分を示し，数地区の代表的民俗服を配置してある。購入した民俗服の小冊子[8]によれば，スイスでは紀元前から Local Costumes が存在していて，それが各時代を経て変化しつゝ現代のコスチュームが一応固定化された。しかし19世紀後半になってヨーロッパ各国で起った工

写真　9

業化や経済発展により商業・交通が盛んになり，そのため民俗文化が一地域に限られることなく混合し，地域的特色をもった Local Costumes は消滅したかのようになった。けれども Local Costumes はお祭りの時には依然として着用

これ，婦人のコスチューム，特に Appenzel や Friburg の或る地方では宗教的行事の時に今日でも見ることができる。アルプスの山岳地帯では牧牛者の衣裳をみることができる。

第一次大戦後はスイスの民俗衣裳は再び盛んに用いられるようになった。というのは彼等の間に精神的文化遺産を尊重する意識が芽生えて，伝統に対する新しい理解が生れてきた。つまり先祖から受つがれてきたものを取り出してきて，それらを儀式の時だけ着用するのでなく，それを基にして伝統的精神を維持しながら流行を取り入れた新しい民俗衣裳を作り出した。そして1926年スイス民俗衣裳協会が設立された。それは民俗衣裳愛好家や郷土を守る人々が集まって，民俗衣裳・ダンス・民謡・慣習などを守り育て、時代に即したものにしていこうと発足した。それから次第に地域的民俗衣裳のグループができて，まとめられていった。

以上のようにスイスの民俗衣裳は変化しているが，その基本型は昔も今も同じで，女性は，ブラウス・胸衣（Mieder と呼ばれるコーセット様の胸衣）・スカート・前掛で，教会へ行く時や寒い日のために着るジャケット，装飾品（ブローチ・ゴラーローゼン・首飾），Head-dress など華やかなものが用いられる。男性の場合，牧牛者は今でも Bredzon を着ている，それはパフスリーブのジャ

写真　10

ケット（カンバス布製）で折衿の上にエーデルワイス（スイスの国家）の花が刺繍してある。ベルン州の高地の田園地方では男子のジャケットはベルベットで作られている（写真10参照)。

女性の服装の白いリネンのブラウスや紐のついたコーセット状の胸衣はイタリヤルネサンス（15世紀）から受つがれている。それから 500年間に胸衣は色々な変化をしてきた。注目すべきものはゴラー（ Goller ）と呼ばれる首をおおうもので，これは16世紀から婦人服の衿の一種として上手に仕立てられた服を保護するものとして使われてきた（写真９の上中央の女性を参照)。これは装飾的役割を担って時代により種々変化した。 また首をおゝうものとして衿巻（Ftchu）があるが，柔かい布の三角形の婦人の衿巻はマリーアントワネットに由来するものである。今日では羊飼の乙女の服装となっている。麦藁帽子もこれと同じ経路を辿って用いられ，この衿巻と麦藁帽子は全ヨーロッパに流行し各地方の民俗衣裳に影響をあたえた。しかし肩掛もフランス系スイスで盛んに用いられた。スカートはギャザーかプリーツがとられていて殆んどが胸衣とは別布で作られ，紐状の飾り布がアップリケされている。前掛は宗教改革の時代に，リネンの大きな前掛が農民の婦人の間で用いられていたが，バロック時代になると華やかな木綿の前掛が羊飼の乙女達によって愛用されていた。前掛は農民の生活に深く根をおろしているから，民俗衣裳について考える時，無視することはできない。働らく日には実用的な前掛が尊ばれ，日曜や祝祭日には絹製の飾り前掛や白の刺繍のあるボイルの前掛などが用いられた（写真10の中央の女性２人参照)。帽子や髪飾りは地方色をよくあらわしていて多種多様である。（写真11参照)。装飾品には，昔から伝わっているものとして，ざくろ石の首飾やブローチがあり，その他金線・銀線で作られたブローチ・髪止め・ピンなどがあり，中でも素晴らしいのはゴラーローゼンと呼ばれているものでゴラーから胸衣に銀のくさりで吊下げられたものである。

以上は要約にすぎないが，スイスでは民俗服の資料として絵葉書・スライド

の種類が多かった。またルッツェルンには丘の中腹にスイス各地方の民俗服をあつめた小じんまりした博物館が建っていて，それは緑にかこまれた長閑な芝生のある雰囲気の中にあった。

写真　11

イタリー……ローマのイタリヤ広場（ムッソリニの構想によって出来た現代建築の並び建つ道路の広い街で，ローマの駅から空港への途中にある）の一角に民俗博物館があり，まだよく知られていないのか観覧者は2時間のうち4人位であった。そこの一室にはイタリヤ各地の民俗服がガラスケースに収められていた。ケース越しの撮影はよい出来ばえではなかったので，そこで購入した絵葉書のうちカラブリヤ地方（長靴の先にあたる地方）のものを写真12に示す。ブラウスは白，スカートは青で裾の部分が赤と金と挽茶色の横縞になっていて，前掛はボタン色に金

写真　12

色で刺繍がほどこされ，それはインドのサリーを想わせる配色である。明るい太陽のもとで着るにふさわしい配色がうかゞえる。ブラウスの上に重ねられた袖は取りはずしの自由な袖で，前掛の色とスカートの色の配色である。

以上の概要はやゝ豊富な内容のところもあるが，写真の紹介に過ぎないところもあり，後日更に考察を進める積りである。

ヨーロッパの民俗服にみられるデザイン

デザインの特色

以上述べた概要から敢えて結論するならば，ノルウェーではバイキング時代の面影をとどめているものがあり，また中世キリスト教が普及してきた時代の面影をとどめている。スイスの民俗服には昔のヨーロッパのルネサンス時代を語り，バロック時代を誇る素朴な模倣を通して時代々々の流行の面影が残されている。チェッコは有史以来，東西南北の交通の十字路にあたり，様々な文化の影響を受けている民俗服はスラブ系の愛らしく彩色豊かなものである。イタリー南部の民俗服の配色にはインドのサリーを連想させるものがあり，明るい太陽に輝やくもとでの生活から生れたものであろう。

かゝる地方的特色を示してはいるが，北欧から南欧まで，その基本型は共通している。つまり女性のコスチュームはブラウス・胸衣・スカート・前掛が主体で，外出用としてジャケット・衿巻・肩掛・Head-dress・首飾り・ブローチなどの防寒または装飾品，靴下・靴などである。男性のそれはズボン・シャツ・ジャケットが主体で，ところによりチョッキなど，外出用として外套・帽子・靴下・靴などである。

これらのコスチュームは北と南による寒暖の差に対しては調節しやすい基本型である。つまり寒さに対しては衿元や袖口を閉じる形態にも出来るし，暖かさに対しては衿元を大きく開け袖を短かくして裸出部分を変化できる。このような形態は気候調節力の優れた基本型といえる。そしてコスチュームの生地は

毛皮から毛織・木綿・麻・絹と寒暖に対して変化している。またこれらのコスチュームは着脱も容易であり，人間の活動を妨げず，身体をよく保護し，全体として合理的な構成である。このように機能的であるばかりでなく，意匠的にも均整のとれた形態で，ヨーロッパの自然とよく調和している。

このような形態を生みだした基盤が何であるか，それは結局ヨーロッパの気候風土に由来していると考えるほかはない。ヨーロッパには太平洋の暑熱なエネルギーを結集して来襲する台風もなければ，冬の北大陸から寒気をもたらす気節風もない。静かで豊かな水をたゝえて流れる幾つかの大河があり，その源をなす万年雪を蔵したアルプスがそびえてはいるが，それはヒマラヤのように人を寄せつけない超然たる高さでもない。麓には牧歌的な山地があり，なだらかな起伏の森林があり，雑草のおい茂らない平野がある。松の木は均整のとれた枝を四方に伸ばしている。日本に見る一方向に枝を伸ばした磯なれ松の姿は見られない。このような風土においては，やはり均整のとれた合理的な服装が生れるほかはなかったであろう。そしてヨーロッパの民俗服は対酷寒服である必要もなく，対沙漠服・対熱帯服である必要もない。人体の快適さを損なわず，人体の活動を妨げず，適当に人体を保護する衣服である。同時に豊かな人間生活の側面を現わし，美意識を楽しませる役割をも担っていると考えられる。そのことはヨーロッパの民俗服にみられる装飾の仕方の中に現われている。

装飾の仕方

そこで次に，これらヨーロッパの民俗服の装飾の仕方について考察してみる。

民俗服に使われている生地は概して無地が多く，それにボーダーをあしらい，刺繍をほどこし，レースを用いている。そしてブローチ・首飾り・バンドの止金などで更に装飾を豪華にしている。日本の農民服にみる刺子（こぎん刺・菱刺）や絣地（久留米絣・山陰の絣）などは見られない。また東南アジアのサロンにみる模様染は見られない。

ボーダーにはレースやリボン状のものに刺繍をほどこしたものを用いている。レースや刺繍の図案をみると，その配置はヴェルサイユ宮の庭園・ウィーンのシェンブルン宮の庭園などを連想をさせるシンメトリーの美しさである。それは片隅に植物や鳥を配置し，他の部分を空白にして，見る人に意味を暗示している東洋的な技法ではない。

ヨーロッパのレースは精巧なもので，「レースの歴史とデザイン」[10]によれば，「レースという語が尼僧院において誕生をみたほど，レースつくりが尼僧の日課となって……，13世紀初頭においては，すでにダーンド・ネッティング・カットワーク・ドロンワークなどの技法のあったことが述べられており……」とあり，また「レースは西欧文明の展開とともにそのはなやかな歴史をくり広げ，古代より現代にいたる各時代の文化の頂点においてはいつもその見事な花を咲かせている。……」とある。レース工芸の歴史を誇るイタリヤ・フランス・ベルギーもさることながら，民芸としてのレースも精巧なものをチェッコの花嫁衣裳の前掛に見た。それは全部手芸によるもので，藍染の麻布に丹精こめた刺繍がほどこされ，裾にレースのボーダーをつけたものであるが，そのレースはボビンレースの精巧なものである。それは日本の大原女の前掛・東北地方に残る刺子の前掛の素朴で質素なものとは対照的である。民俗文化の豊かさと貧しさの対比をみる思いがする。わが国の残存の農民服には上層の搾取によって貧しい生活を余儀なくされた姿しか見られない。それは江戸時代の階級制度の社会における身分的差別による結果を如実に示している。

日本にレースが輸入されたのは明治に入ってからのこと，それまでは日本の服装にレースは用いられなかった。ヨーロッパの民俗服の美しさを感じる場合，レースの装飾的効果を無視することはできない。

以上のように，民俗服に托された装飾の意味が，地方色を現わす印であっても，身分を示す印であっても，自己をディスプレイするためのものであっても，夫々が均整のとれた美くしさを発揮し，前掛一つにも嫁ぐ日の夢を托して丹念

に作られた労作がにじみ出ている。

結　び

以上主として中欧の民俗服の概要と，そのデザインの特色の一端にも触れた積りであるが，それらの民俗服の一つ一つをみてゆくと，着るものに托された人間の美意識の断片をみる思いがする。その存在の根底には人間の身を飾ることへの慎ましやかな憧れといったものが密んでいるようである。それは貴族の衣裳にみる裳裾を長くひいて精巧を極めた豪華さはないが，人間の心を一種の郷愁にさそうような懐かしさをあたえるものである。このことはヨーロッパの民俗服に限らず，他の諸国の民俗服にも言えることであるが，日本の農民服・インドのサリー・アラビヤ人の衣服などとは異なったデザインの衣服が形成されている現実に接する時,気候・風土の相違・民俗の相違・歴史の相違・文化の相違を強く感じる。しかし文化交流により国際的な流行服が世界的に普及している現代において，民俗服の将来をどのように想像することが出来るだろうか。

文　献

① 服装大百科事典　下巻，被服文化協会，文化服装学院出版局，昭和44年３月
② 民俗学辞典，民俗学研究所編，東京堂出版・昭和43年10月（35版）
③ きもの，瀬川清子著，無人社，昭和17年11月
④ 世界のきもの，田中薫・田中千代共著，保育社，昭和40年７月
⑤ Folk Costumes of Norway, 1966年
⑥ Looking at Holland, Anna Loman
⑦ National Costumes of Czechoslovakia, Blažena šotková
⑧ Schiveizer Trachten, Louise Witzig・Hedwig Eberle, 1959年
⑨ Museo Nazionale delle Arti e Tradizioni Popolari, 1956年
⑩ レースの歴史とデザイン，日本繊維意匠センター編，昭和37年６月